

## 三才丸

此薬を服するとき、こころにおもふことには、脩身齐家、正心誠意、孝弟忠信、仁義礼智、勸善懲惡、衆善奉行、此十六字を一心不乱に念誦すべし。奉公人忠義第一、人の子としてハ孝順、少者ハ長者をうやもふ。農工商のいとなみ、その品をわすれてこゝろにおごりあれば、二三代にして家おとろふ。商人などハ、かいてを大客人として、丁寧をつくし、よろづいんぎんにして無礼なきを長人の基とす。小あき人、小職人などの、無礼にして、よろづふつゝかなるハ殃多し。人の信心といふハ、こゝろにまことあるをいふなり。人のにくむものにハ、神ほとけの擁護なし。いかほどのるといふとも、災ますのみにして、福祥なし。おそるべし。

## 士徳後室へ申きく

寒ハさむし、暑ハあつし、年々としのつもるを見れば、眼横鼻直なくがわるふが、さしたる不思議もなしとすべし。正心誠意ハ不老不死。脩身齐家ハ子孫繁昌。なむあみだぶつハ無量壽尊。片時もゆたかに、こゝろしづかに、よを長く、まつりをいとなみたまへ。

もろこしの風ハ、天のこと、地のこと、人のことを詳に記伝し、一朝一朝ハいふに及ばず、三皇五帝ころより今のよまで、各々その史ありて、その君、其臣、その治、その乱、その聖、その賢、その愚、その悪、千百年の間、あらゆる吉事凶事の考ふべきにいたるまで、是を詳に記載し、その外、朝廷仕進の文徳あるもの、其人其家の集めりて、是を千歳につどふ。よろづの事、学士大夫の史書に、詳に逸民遺老の筆記に及ぶまで、是をその朝にえらびもとめたもふといふほどの事にきこへ侍る。婦人女子の瑣々たる事まで、人道に益あることの、人の教となるべきを、ものしたもふことなしといふ。此方にもかくあることにや、昔のものがたり物などをたづねもとめて、一々よむべし。みな聖世の人の善道を専要とし侍る事なり。みな勸善懲惡の道理、衆善奉行の事にして、民の父母たるの御慈念なれば、なにとなく風調雨順、民安樂をのみ、戸ざゝぬ御代といふ。御誓願被為成御事にきこゆ。民もまた、其御洪恩を忘るべからずといふ。つゝしみおもふべきことなり。

人ハ忙しきをよしとす。ひまなるハよろしからず。小人間居して不善をなすとあり。百丈禅師、馬祖大師なども此事をいへり。一日なさずバ一日食ふべからずとあり。富にして貧なる人も多く、貧にして富なる人もすくなからず。いづれにしても、読書写字、てすきあらバ、是をこのむことなり。文学のこのみありて、昔のことをきゝ、もじ見をし、師を扱ひ、友をもとめて、人の人たる道理を詳にする事なり。人のいのちハ、高貴卑賤を差別して、長短あるものにあらず。まことに少水の魚のごとし。あしたゆうべのすこしの間に灰となり、土となる。せハしきものゝゆだんならざる命なり。太平のよに生ること難しと、仏ハとき給へり。今ハ太平の御代、是を聖代ともいふべし。実に戸ざゝぬみよといふ、是なり。人々その業をたのしみて、一日々々を安樂におしうつり侍りなり。はなハだゆたか

なり。

身没して家さかゆるもあり、身ありて家おとるもあり、身も家も同じくおとるへ、身も家も同じくほろびはてぬるもすくなからず。天下の大より末々のものに至る迄、この盛衰、この興亡、むかしより数もかぎりもなきことにして、その小ハさたに及ばず、その大ハみなその記伝あり。天下の人々みなこれをよむなり。是を詳にしるなり。その善悪を後のよの人々、其記をよみて勸善懲惡の道理をしるか、こりつゝしむと、善道をすゝめしとふと、よき師を、よき友をたづねもとめて、その事をよみもし、きゝもし、ならいもして、誠意正心、脩身齊家、よろづの事、人心をうしない侍らず。ゆたかに日月を拝み奉り、たゞ子孫の光榮をいのり奉るこゝろのみならば、さのみあしきことハあるまじきに、自由なれば人とハならず、人となるハ自由ならずと、もろこし人のつねにこれを子共に教へ侍る。女などの、よろづ己がかしこくて、一も二もくハぬといふ自まんつらなるハ、かならず家をほろぼす。男をそまつにおもふこゝろあれば、みやうがをうしない侍るなり。

人間世、毀譽の二つなり。そしるほめるのふたつ、彼我ともに是なり。あちでもこちでも、たゞこの二字なり。毀ばかりもなく、譽ばかりもなし。人をしるもなし、しらぬもなし。我が分際ハどうじや、よむか、かくか、人の道理をしるか、我ばかりよきか、人ハどうじや、位ハどうじや、全体の人柄ハ、なんとすべての脩行などハどうじや。孝弟忠信ハいハずと人の自然なるに、千にひとつも不届もの、誠意正心ハ学びていでくるものにハあらず。是も人の自然にして、よきによきを教へ侍るハ、錦上に花を鋪く道理、あしきもよきに交りて、よき事をきゝ、もじ見もしするときハ、ふとよきにうつるもあり、又もとよりにあしくなるもあり、へんくつものをきろふなり。たゞ我のみをよしと定めて、人をバそしる。我が定木のいがみたるを直なりとこゝろへ、人の直なるをいがみたりとおもふハ、いかにかねもちの愚人より、貧乏人の智者ハいかん。それも、ゆだんハならぬものなり。よからぬことを工夫して、かねほしがるハどうじや。それを山師とはいハぬかな。世に山とハいゝしぞ。

もろこしの風、山林草野の才徳兼備の士の逸したるを詳に迅問し、或ハ、ところかくの刺史県令、その人を問いもとめて是を朝に奏し奉る。一々えらびたゞして、挙任及第、直に一職補任、一族光榮、たとへ牛ひき柴になふ夫といふとも、是をもらし、すてさせ給ふことなし。此事にすこしもおこたりあれば、はやそのことをなげきて、中原に麟鳳の祥瑞なきに志もあらざれども、皇家あみをむすぶのあらゝしくて、皆もれいで侍るなどいふことを調咏し、この詩句いつとなく、皇家の御きゝに達し、是を御一代のはちとし給ふことなれば、操行高潔の学識ある、あらハれずといふことなし。この陳公ハ、選挙のことを録せず。たゞ郡守嚴譔がこゝろみに逢い侍るも、遺憾とすべきか。小妾蓮花よもすがら左右し侍るに、ついにこれを納めず。是非なく詩を献じて辞し侍る。不便といふべし。蓮花のきよきすがた、尚書、是を珍重し、陳公に納るべきこゝろありて来り侍るに、処士巫峽の夢をなし給はず。むなしく陽台を下り侍るが、などの愁も恨もなにとなくふくみ侍る。是、処士まことにふかく、文君がなさを無にし侍る。深愧といふべき所なり。ゆへに、

操行高潔、央をてらし侍るなり。人の慎とすべき所なり。

五代盧文紀 後唐廢帝扞相、悉書清望官名、納琉璃瓶内、祝天以筋策之。前得盧文紀、次姚顥帝、素奇其才同升相位。

もろこしの諺に将相無種、いづれといふわかちもなく人才を扞る。清望人柄のすぐれたると官名とを書いて、琉璃の瓶にこれをいれ、天に祈誓し、其人其官に応じ、朝廷の輔佐万国請治人民安堵すべきの天意にかないたるをといふの誠意、はしを入れてその名札をはさみとり上げ侍る。かねて叡聞に達し、もとよりその才を慕ひ給ふに、すなはちその二人是を得給ふ。是天也といふべし。

人の世に処する無我無心などいふことを、称義するやうにきこへ侍る。是は禅僧などの迷悟のさたより、いゝいでしことにして、毒にも薬もならで、たゞ朝夕のつとめを正直に、そのすがたを殊勝なりなどいゝもてはやし、一人の饑寒をたやすく、犬馬の齢をたちへ侍るのみのことにして、よにも人にも緞芥の利益なく、一生を無我無心、臨濟ハこれらを繁驢橛などいふものにとへ侍る。馬をつなぎ侍る杭をいふなり。馬をつなぐばかりの用にして、くち侍るなり。又、担板漢などハ、大板をせをいて、一生これをはなちやることをしらず、しやはりかへるをいふ。又、焜酒逆漢などハ、一生酒のかすにくらひ酔たるものゝ、醇酒のあぢをしらず、すみはて侍るをいふ。臨濟和尚の時、すでにかゝる僧行なれば、其後のことを、さつしおもふべし。

下の者の、みだりに寺院を建立せしなどハ、金銀あるにまかせて、驕慢のこゝろより、是を結構し侍る。多ハ家をほろし、子孫をたち侍る。達磨大師の無功德といゝしが、梁武もほどなくよをうつし侍るなり。つゝしむべし。又しかたもあるべき事なり。

天地陰陽の正をみな転倒し侍るゆへの事なり。おそるべし。つゝしむべし。人の道理の正明なるハ、こゝろさハやかにして、口しづかなり。一黙雷のごとしなどいふ所ありて、よろづいハねども、人々おそれつゝしむ所あり。こゝろくもりて口のさハがしき、よろづかまひすぐて、後にハなきハめく。人々もてあつかふ様になりゆき侍る。いきながら鬼になり侍るぞなど、ゆきかふ人々のうハさに、たゞこの女のことをはづかしきことなり。家もほろぼし、児孫もたつべし。神ほとけも見はなちたもふゆへの事なり。ふかくつゝしみあるべし。

害もまた多きものなり。その人を弁じ、わかつこと、なか／＼常流のたやすく是を得べき事にあらず。我が正心誠意より自然と分明不思議のことあるものなり。慎独のみやうがなり。よきを見しりて、しとふこゝろあれば、是非にあしきは益なしといふことを、詳にするなり。

(原本に脱あり)

なり。そのこゝろあれば、ふとして五もじ、なゝもじ、はなのいろハうつりにけりな、といふまじきものにもあらず。鳥のこへして函谷関をいつかハリ侍るとも、此逢坂の関ハ

なかく、ひらくまじきといふ。女のつゝしみ、たしなみ、すこしの事なり。大事なり。男ハ百行、女ハ一貞といふ所をしるべし。おもしろき事なり。

八つのまつりごと、食よりはじむといふ。又、いかをハかりて、いつ、此に給すとあり。これを経済ともいふが、此事にこゝろなきものハ、はなハだ危し。学もんハ、たゞこのことを大事とするなり。脩身齊家といふも外なし。学者などの世事人事にうとしなどいふは、無学にとりたるものとすべし。孝弟仁義の道理をいふに、世事人事をはなるべきや。正心誠意、脩身齊家ハ、みな人事なり。みな世事なり。僧などの世事人事にくはしからざるを、道人などいふもあやまり侍るなり。むかしの知識達、各々数学にも達し侍り。臨海徳山の法道、その清規、作法の次第、一々是をかきあらハし、其職位を定めて、金銀米錢諸道具にいたるまで是を詳に上帳して、諸堂より小部屋くゝにいたるまで、是を見廻り、脩理の事、改作の事、両序の執事をあつめて是を其主に申て、評議正く、その上にてそのことをとり行ふ。有力の檀那ありて、その檀那へ是を申て、その事をなしとげ侍るもあり。寺領あり、又、祠堂金などあるは、其内にてその事を取斗ふ。みだりにすゝめことなどをよき事にして、信施を費し侍るを禁じ侍るなり。故に経済のこゝろなく、よろづしどけなく経をよみ、座禅をすればすみ侍るなど、一決、人の道理をしらで、破家散財の外道をいむなり。ゆへに、才を量て職を補ふなどいふ文字をこゝろとし、其人其職の相応してよろづつまづきなき様に、二時の粥飯、三時の座禅、朝暮の読経、天下太平の御祈祷、国恩仏恩を至心に奉謝し侍ることなり。みな、正心誠意、脩身齊家を離るにはあらず。よき寺の住持して、あたゝかに衣服し、むまく飲食して、元來を失脚し侍る僧の為に、古徳の示しあるを見るに、檀那の水をのむことを得ざれ。水をのむハ血をのむがごとし。阿蘭若に住することを得ざれ。住所は墓を守がごとし。たゞ何ごゝろなく住持し侍るものハ、つかを守りて血をのむものぞといふ。畏るべき事なり。中遊山玩水ハ身分相応す。もの見といふハ、見物の事なり。人のするやうに、これをたのしみ侍るがよし。よきをうらやむこゝろあれば、おごりをかさね侍るなり。人数ほどのわり子をたづさへ、こゝろしづかに、山のすがた流のきよきを、花鳥風月の自然と、こゝろをよるこぼしむる趣を感じ入るほどのこゝろあれば、何となく、やさしきこゝろ生じ侍る。

唐 盧儲舉進士投卷謁尚書李翱。翱置文卷几案間、長女及笄閱其卷、謂小青衣曰、此人必為狀元。翱乃招為婿、明年果首唱。成婚之夕、儲作催粧詩曰、昔年曾向玉京遊、第一人許狀頭、今日已成秦晉約、早教鸞鳳下粧樓。

李翱の長女、盧儲の詩及文を見て、其侍婢にいふ。此人かならず狀元たらん。其言を父の李翱、是をきゝ其意を得し、すなハち招きて、むことし侍る。明年はたして壯元の首唱いちふてなり。此女もよく人才を見届侍る。小青衣ハ、日本腰もとなどいふ侍女なり。文才を一として、容陣を次にす。学才を一とし、身代を二とす。女子といふ共、このことを詳にす。是が文国の風儀なり。卓王孫の女、文君司馬相如が学才にめでゝ、しばらく貧

苦を堪へ侍るもこれなり。

文武といふときに、文ハ文ばかり、武ハ武ばかりと、人に決したることにハあらず。文武ハ鳥の両翼のごとしといふ。その一片、かくべきにあらず。むかしの名高き名将勇士の詩あり、文あり。みな今に伝ハりて千百年のち人々是をしる。実に不朽の盛事なり。

一年三百六十日の日数ハ、多きやうなれ共、瞬息の間にしてはや明年となり侍る。しからバ、五十年百年とまつほどもなく、人々その寿をたち得べきことに、百歳の間百歳の人あることを見ず。花前にして、こゝちよく酔ふことも、生涯の間にかほどあることぞ。酒錢をしまし、貧しきことをいはずして、はるのはなをたのしみて、よをしまし、く過し、はづべき道理、このこゝろあらバ人のみちにたがはず。よくよく人との道理をさとり侍る人なれバこそ。

人々怨尤の二字ハ免るべからず。賢愚共にこれあるべし。人をうらみつ、人をとがめ侍る。喫茶喫飯の間もたゞ人の事のみをいふが、彼もかく、此もかくと、家々人々黙々たるハあるまじ。たゞ善をいふことをこのみて、悪をいハぬがよしと決定すべし。その善悪を分明に決定し侍るを、殊によしと定むべし。いづれも自省して、よきを慕ひ悪をあらたむることなり。窮してハ、猶更よを恨み人をうらむるやうに、こゝろひがみて、我ばかりよきにいかなるゆへに、貧苦にせまり侍るぞ。まづしかるべきものハ、なにゆえまづしからぬぞなどゝおもふすがた、明々とあらハれ侍る。見る人これを見る、知る人是をしる。はづべし。

文士にして徹骨の貧なりといふとも、花鳥風月の時々たのしみあるに、詩をいゝ、うたをいふほどの余情もなく、たゞ貧をのみくるしみて、よをうらみ、人を恨みて天理も人理もわすれはて侍る。人々命と分とすでに定り侍るを、露程も是を省せず、なにとなくこゝろみだれ、たゞそのいかりのけしきのみ。人々是を見て、是を畏ち慎み侍るなどハ、一向に人の和をうしない侍るが、いよく濫して、いよく窮すといふになりはて侍る。人はその時その時の模様を見はからい、自身は自身、これを救ふものぞとこゝろへ、その貧苦の骨に徹せざるやうにこゝろへあるべし。

人もほとけ、あみだもほとけ、しやかもまた、人のほとけぞ、名づけてあける、人の品数とあれど、みな人の人のなかにて、人ハさだまる。

この翻刻にあたっては平野翠氏（奈良大学非常勤講師）の御教示を受けた。